

## 一般社団法人粉体工学会第6回功績賞授賞理由書

受賞者：東谷 公

功績賞推薦委員会

### 授賞理由

東谷公氏は、九州工業大学にて講師、助教授を経て、1983年に教授に昇進し、1992年に京都大学教授に就任、2008年の定年退職まで長年にわたり教育・研究の第一線で尽力した。退職後も、名古屋工業大学プロジェクト教授や同志社大学研究員などを歴任し、粉体工学・化学工学分野の発展に寄与してきた。

同氏は「液相微粒子分散系の体系化」に関する研究に一貫して取り組み、特に原子間力顕微鏡（AFM）を用いた微粒子表面微細構造と微粒子安定性の解明、微粒子の動的挙動の実験とシミュレーションなど、世界をリードする先駆的な業績を挙げている。また、ナノ粒子の自己集積能を利用したフレキシブル透明導電膜の創製に成功するなど、微粒子ナノ構造がマクロ挙動に与える影響に関する系統的な研究を世界に先駆けて行い、顕著な成果を収めた。これらの研究は、国内外の権威ある学術誌に202編の原著論文として発表されており、その成果が高く評価され、粉体工学会上滝論文賞、Advanced Powder Technology Distinguished Paper Award、井伊谷賞、粉体工学情報センター学術奨励賞、ホソカワ粉体工学振興財団 KONA 賞、化学工学会論文賞・研究賞・学会賞など、数多く受賞している。また、2025年には多年にわたる教育研究の功労により、瑞宝中綬章を受章している。

粉体工学会においては、運営面で1989年から1998年まで常任幹事を務め、その後2008年まで理事として本会の基盤強化を牽引した。本会の英文誌『Advanced Powder Technology (APT)』の編集委員（1990-1996年）および編集委員長（1996-2006年）を歴任し、同誌の国際的な学術的地位の向上に大きく貢献した。国際交流では「International Fine Particle Research Institute (IFPRI)」のメンバーとして世界屈指の研究者と交流を深めたほか、国際セミナー「Nisshin Engineering Particle Technology International Seminar (NEPTIS)」では、1992年から2013年までの21年間にわたり企画運営委員長を務め、若手研究者の育成と国際ネットワークの構築に尽力した。さらに、化学工学会理事や国際誌「Chemical Engineering Science」のExecutive Editorを歴任するなど、関連分野においても粉体工学のプレゼンス向上に大きく貢献した。

以上のように、東谷公氏は粉体工学会の学会活動、学会誌、集会行事などを通じて粉体工学の発展に顕著な貢献が認められ、粉体工学会功績賞受賞者として相応しく、ここに推薦する。